

医師協だより誌上 DJ!

— 今回のテーマは、昭和歌謡 (下) —

三原市城町／内科 小園 亮次

カテゴリー (2) 昭和曲のカバー

昭和曲のカバーという切り口でネットサーチしてみると、実に実に秀逸な曲がたくさんあります。昭和曲のカバーというだけでも一つのジャンルです。カバーの醍醐味は、同じ曲で全く違う世界を作り出すことです。「昭和」がある程度薄まっているものもあります。しかしそんな曲でも、生まれ育った「昭和」の気配は隠せず、そこがなんとも言えない良さを醸し出してくれています。サザンオールスターズは70年代よりも少し前の歌謡曲、ザ・ピーナッツとか、の世界観を再現することがテーマの一つであると言えますが、昭和40年、和田弘+マヒナスターズ+田代美代子の「愛して愛して愛しちゃったのよ」の原由子によるカバーはとてもいいです。マヒナスターズは小指を立てて歌う「ムード歌謡」の大御所ですが、同時に当時流行した「ハワイアン」の人たちでもあります。原由子バージョンはスライドギターをとともうまくアレンジして夏のリゾート感と恋の恍惚感をうまく表現しています。

ピチカートファイブは1990年代に「渋谷系」と言われて一世を風靡したバンドですが、そのフロントマンの小西康陽は歌謡曲好きを公言していて（フィンガーファイブの個人授業とか）、こういう人たちがニッポン独自のポップカルチャーを世界に発信できるのではないかと思っていました。今回私がおすすめしたいのはそのピチカートファイブでボーカルだった野宮真貴が2016年に発表した「或る日突然」です。オリジナルは「トワエ

モア」で、これがヒットしていた当時は、昭和フォーク的な湿っぽさが正直好きではありませんでした。ところがこのバージョンをお聞きください！ 同じ歌詞なのに、とても洗練された現代の恋の歌に聴こえます。作曲者である村井邦彦とのデュエットです。

次は、稲垣潤一。名前を聞いたことがある人は多いと思います（「♪クーリースー・マスキャロルがー」の人）。私はこの人のことをあまり知りませんでした。めっぽう歌がうまくて女性には「セクシーな歌手」として人気があるみたいです。1953年生まれなのでもう70歳近い方なのですが、すごい声の高さです。今回「男と女5」というアルバムを発見し、この中から、小野リサとのデュエット「ひこうき雲」をピックアップします。あの有名な荒井由美のひこうき雲のボサノババージョンですが稲垣の歌より、小野リサが抜群によい。彼女の力の抜けた声を聞いていると、目の前に広がる海を見ているような幸せな脱力感にとらわれ、感動するのです（ただこの曲は空を見て亡くなった同級生に思いをはせる歌ですが）。この曲の入った「男と女5」というアルバム、全曲が昭和・平成のヒット曲のカバーで稲垣潤一が曲ごとに選ばれた女性シンガーとデュエットするという企画ものです。どの曲も完成度が高く、アルバムごとおすすめできます。曲もさることながらアルバムジャケットの写真は、稲垣が往年の名車スカイラインGTR（ハコスカ）の運転席に座り、その後部座席でピースしている女性（デュエット相手と思われるが

誰かわからない) がチラと見えるというもので、「昭和」とほのかなエロさが表現されています。このアルバム、「男と女5」の5が何を意味するか気をとめてなかったのですが、のちに1から4までもあることが判明、すべて違う女性とのデュエット。さらにジャケットも全部、稲垣本人と若い女性の濃厚な「男と女」を意識させるような思わせぶりの写真ものばかり。稲垣潤一の旺盛なる恋愛体質を想像させます。

昭和カバー、もう一つ是非ともご紹介したいのはなかの 綾です。この人は昭和60年京都生まれなので、いわゆる「昭和」は体験していません。ですが、彼女、京都祇園の有名ジャズクラブRaposの専属シンガーとして歌手の世界に入り、現在は東京で現役のホステスしながら歌手活動を続けているという異色のシンガー。そのレパートリーはザ・昭和歌謡。しかしなぜか新しい。クレージーケンバンドや東京スカパラと共演するなどクラブシーンで絶大な人気を誇っています。ご紹介するのは「WOMAN」。薬師丸ひろこが映画「Wの悲劇」の主題歌として歌った有名曲ですが、なかの 綾のバージョンはCENTRALという日本のベテランサルサバンドとの共演でこの曲は完全にサルサです。歌、というか声がいい。松本 隆作詞の歌詞が速いサルサのリズムに完璧にマッチしています。ちなみに作曲は呉田軽暮(松任谷由実)。薬師丸の原曲とは別物です。ちょっとマニアばい音楽雑誌(ミュージックマガジン)の2019年歌謡曲の年間ベストワンとして紹介されていました。是非聞いてもらいたい曲です。

カテゴリー (3) ネタとしての昭和

続いてカバーではなくて「昭和」のイメージで創作された作品、あるいは創作テーマの核心に「昭和」的な要素のあるアーティストの作品につきご紹介します。ただし、これは本人たちが「昭和の歌です」と表明しているわけではなく、私が勝手に「これは昭和っぽい」と感じているだけです。しかし「昭和っぽい」楽曲というのも「昭和カバー」とはまた別のジャンルになっているといってもいいでしょう。例えば東京スカパラダイスオーケストラの「憂愁モダン」。この音階とメロディーは「昭和だ」と納得していただけたと思います。

さて「昭和ネタ」の曲。まず一押しはエゴラップインの「色彩のブルース」という曲を聞いてみてください。まだ音楽配信が主流ではなくCD屋で情報を仕入れていた頃。パルコのタワーレコードのおすすめ盤試聴コーナーで物色するのが楽しみでした。ある寸評に「洋楽しか聞かない人、とにかく聴いてください。邦楽の認識が変わるはずです」と紹介してあったのがこの曲でした。8ビートでマイナーキーのジャズ。タバコの煙でむせかえるようなジャズ喫茶のイメージ。やるせない情感を気だるそうに歌い上げる女性ボーカルとバックの演奏の成熟度の高さ。すべてに驚きました。これぞ「昭和」です。

昭和を感じさせる最近のアーティストのなかで真打は椎名林檎ですね。彼女は特に「昭和」をテーマに曲作りをしているわけではないでしょうけど、一貫して「ニッポン」とか「日本語」を意識しているように感じられます。例えば彼女は「新宿系」といわれます。この言葉、雑誌のインタビューで本人が自身を評してなにげなく発したらしいですが、彼女の一面を表すのにこれほどの確かな言い方はないでしょう。おしゃれな「渋谷系」に対比

していることに自分の立ち位置が明確に意識されています。ドロドロして、情念と欲望にまみれて、エネルギッシュな新宿。まさに昭和の一断面を写している街。そこに創作の原点を見出す感性、覚悟、作品の完成度の高さ。素晴らしいアーティストだと思います。こういう人にTOKYOオリンピックの開会式をプロデュースしてほしかった。どの曲もよいけど「昭和」文脈からは「歌舞伎町の女王」をご紹介。歌舞伎町の女王様の娘として歌舞伎町で育った「ママと生きうつしのような」娘が「今度はわたしがこの街の女王」と歌う曲ですが、そんな複雑な設定をきれいにまとめた歌詞といいその歌のうまさ、アイデア、演奏。すばらしいです。同じような系統で迫力があるのは「罪と罰」。これはvocal

がセクシーでワルっほい。バックのサウンドがヘビーでかっこいい。椎名林檎のバックミュージシャンかなりハイレベルとされます。なんか日本人が演奏している感じがする(いい意味で)。

ということで昭和をキーワードとした楽曲巡り。多分かなり偏った趣味をご披露しました。まだまだ興味深い歌手やアーティストはたくさんいます。なお原稿で出てくる曲、特に新しい曲の多くはこの度新しく発見したものですので、知識、認識がだいぶ付け焼き刃的なものをお許しください。何はともあれ、皆様に興味を持っていただきいつの日か音楽談義ができれば幸いです。

(おぞの りょうじ)

曲リスト

歌手名	曲名	作詞	作曲	アルバム名など	発表年
原由子 & 稲村オーケストラ	愛して愛して愛しちゃったのよ	浜口庫之助		稲村ジェーン	1990
野宮真貴 Duet with 村井邦彦	或る日突然	山上路夫	村井邦彦	(2016渋谷系ソングブック)	2016
稲垣潤一 小野リサ	ひこうき雲	荒井由美		男と女5	2015
なかの綾	WOMAN	松本隆	呉田軽暮		2019
東京スカパラダイスオーケストラ	憂愁モダン	東京スカパラダイスオーケストラ			2019
EGO-WRAPPIN' (エゴラップン)	色彩のブルース	EGO-WRAPPIN' (中納良恵, 森雅樹)			2000
椎名林檎	歌舞伎町の女王	椎名林檎			1998
椎名林檎	罪と罰	椎名林檎			2000